

## マ ラ ヤ 大 学

## The University of Malaya

シンガポールの市街地から島の中央を一路北へ、ジョホールに向かって熱帯の太陽の下に白く長く伸びているブキテマ(Bukit Timah すずの丘の意)路を進むと、ほどなく左手の小高い丘陵にいかにもイギリスのカレッジ風の構図をもった建物が見えてくる。これが1920年代の末にイギリスが作ったラッフルス・カレッジ、1949年以後 The University of Malaya と改称して本格的な大学への道にふみ出した当地の最高学府なのである。それから10年、マラヤ連邦の正式独立後、1959年には連邦首都クアラルンプール(Kuala Lumpur)に分校が設けられ、62年からシンガポールの方は The University of Singapore、クアラルンプールの方は The University of Malaya という名のもとに正式に分離することになっている。現在の学生数はシンガポール約1800、クアラルンプール約1100である。以下この大学の社会科学部門と東南アジアないしマレイシアの地域研究に関する研究業績とを紹介してみよう。

## I 経済学科

シンガポールの教授陣は主任教授 Dr. Lim Tay Boh、担当は社会会計、財政政策、国民経済、*Problems of the Malayan Economy* (ed.), Singapore, 1956. *The Economic Development of Singapore*, Singapore, 1960 などの著作がある。

Dr. You Poh Seng は統計学。

Dr. K. R. Chou は貨幣論、財政学、1960年に ECAFE の委嘱を受けマラヤ連邦の貯蓄調査を行なった。

Dr. J. A. Bottomley, 経済分析, 貨幣論, 金融論。

Dr. S. C. Fan, 農業経済, 統計学。

Dr. D. J. Blake, 経済分析, 労働経済。

Mr. Ng Hean Weng, 経済原論, 国際経済。

Mr. J. J. Puthuchear, 1961年なかばまでシンガポール政府の経済開発関係の要職にあった少壮のエコノミストで経済制度論を教え、著作として *Ownership and*

*Control in the Malayan Economy*, Singapore, 1960 を数年前政治犯として拘禁中に獄中で書いた。

Mr. Lee Soo Ann, Quantitative Programming を担当。

そのほか数人の時間講師がおり、またコロンボ・プランにより経営学、会計学講座新設のため、1961年から5年間のプロジェクトとしてカナダの The University of British Columbia から Dr. L. G. J. Wong, Dr. N. Hall, Mr. D. McDonald の3教授が派遣されている。

クアラルンプールの教授陣は主任教授 Prof. Ungka Abdul Aziz がマラヤ大学出身で、農村経済、協同組合論、コミュニティ開発論、経済調査方法技術を担当する活動的なマラヤ人エコノミスト。著作として “Nationalism in Malaya” (T. H. Silcock と共同執筆) in *Asian Nationalism and the West* (11th I. P. R. Conference), 1953. “The Development and Utilization of Labor Resources in Southeast Asia,” in *Nationalism and Progress in Free Asia* (Johns Hopkins Univ., 1956), “The Causes of Poverty in Malayan Agriculture”, “The Remedy for Rural Poverty”。最後の2つは Lim Tay Boh (ed.), *Problems of the Malayan Economy* 所載。

Mr. R. Ma, 会計学。

Dr. V. V. Sayana はかつて FAO 在勤の経験があり、農業経済、開発理論担当。

Dr. S. J. Gilani, 原論, 財政学。

Dr. M. C. Agarwal, 統計学, 農家経営担当。

Mr. Lim Chong Yah, 1960年までシンガポール政府の貿易担当官であった。マラヤの経済法規を教え、「マラヤの輸出税」に関する論文執筆中。

Mr. Lo Sum Yee, 経済思想史担当。

Mr. Yip Yat Hoong は現在ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスでマラヤのすず産業に関する論文執筆中。

ほかに前記のコロンボ・プランにより Prof. A. Beedle

## 研究機関紹介

(会計学), Prof. W. Hughes (マーケティング) が派遣されており, また連邦国立銀行と大蔵省から国際経済, 金融論担当の臨時講師が派遣されている。

シンガポールの経済学科では, 実態調査ないし1次資料に基づいた卒業論文を提出させる制度になっている。これらの論文は大学に保存され, マラヤ経済の実態を知るうえで少なからぬデータを提供するものであるが, そうした学生を動員して集団実態調査作業が種々行なわれてきた。前記のマラヤ連邦貯蓄調査もその1例だが, ほかに次の調査がある。

(1) Petaling Jaya 住宅地の半耐久製品消費動向調査 (Prof. Aziz, Mr. Yip, Mr. Lo 指導)

(2) ゴム・プランテーション分割化の経済的社会的影響 (Prof. Aziz 指導, 連邦政府助成金交付)

(3) 連邦土地開発公社関係7セトルメントの産物のマーケティング可能性に関する調査 (Dr. Agarwal 指導)

(4) 首都クアラルンプールの外港 Port Swettenham 拡充計画に関連する10年後の港湾設備の未来図作製 (Prof. Aziz, Dr. Gilani, Mr. Lim 担当)。

シンガポールの経済学科内に Liaison Centre for Economic Departments in Southeast Asian Universities が設置されており, 東南アジア諸大学経済学部の動静, 研究, 教授に関する情報を隔月に発行するブレティンとして提供しており, 非常に役にたっている。

## II 歴史学科

シンガポールの教授陣は主任教授 Dr. K. G. Tregonning はオックスフォード大学出身のオーストラリア人。マラヤ史担当。著書として *Under Chartered Company Rule—North Borneo 1881-1946*, (1956), *North Borneo*, (1960) があり, 1962年に *A History of Malaya* を出版の予定。現在 the Straits Trading Company の歴史を研究中である。

Dr. Eunice Thio はロンドン大学で博士号を得た中国系マラヤ人の女性。 *British Policy in the Malay, Peninsula, 1880-1909* を近く刊行の予定。

Dr. Wong Lin Ken は同じくロンドン大学出身の中国系マラヤ人。著作として *A Study of the Trade of Singapore, 1819-1869*, (monograph; with the Malayan Branch, Royal Asiatic Society), *The Malayan Tin Industry to 1914*, (monograph), 現在 *Land Laws, Customs and Practices in Malaya, 1786-1914. A*

*Study of Their Political, Economic and Social Origins and Consequences* を研究中。

Dr. K. J. Ratnam はロンドン大学出身。政治思想史, 政治機構論 (東南アジアを中心とする) を担当, 著作として *Communalism and the Political Process in the Federation of Malaya* (近刊)。

Mr. Machin はオックスフォード大学出身で近代ヨーロッパ史担当。専攻は19世紀ヨーロッパ史。

Mr. Wen Chung Chi はシンガポール南洋大学とケンブリッジ大学出身, *British Policy and the Chinese in Malaya in the 20th Century* の著作がある。

Mr. R. Suntharalingam, マラヤ大出身。担当は東南アジアを中心としたアジア史 (1500~1950)。現在 *Establishment of British Power in West Sumatra, 1685-1760* を執筆中。

Prof. S. Q. Fatimi はパキスタン人の客員教授としてイスラム史担当。「東南アジアにおけるイスラムの歴史」の長期研究に従事している。

Prof. Lea Williams はアジア財団資金による客員教授。アメリカ史担当。著作として *Overseas Chinese Nationalism in Indonesia, 1900-1915* があり, 現在 *Sino-Indonesian Relations since 1949* を研究中。また *Singapore as the Communication's Centre of Southeast Asia's Overseas Chinese* の研究立案中。

そのほかに目下進行中の Ph. D. 論文として,

P. Burns, *Constitutional Development in Perak, Selangor, Negri Sembilan and Pahang, 1896-1941* (ロンドン大学)。

M. A. 論文として

Jabir Kaur Dheliwal, *The Issue of Merger between Singapore and Malaya, 1896-1960*,

D. Samuel, *A Comparative Study of the Government of Malaya and Singapore, 1945-1960*,

Mrs. L. Tan, *The Malayan Chinese Press, 1920-1941* がある。

クアラルンプールの教授陣では, 主任教授 Dr. J. S. Bastin はオックスフォード出の少壮教授で18, 19世紀のマラヤ・インドネシア経済史専攻。著書として "Raffles's Ideas on the Land and Rent System in Java," in *Verhandlungen*, T. L. V., XIV (1954), *Raffles in Java and Sumatra: an Economic Interpretation*, Oxford, 1957, *The Western Element in Modern Southeast Asian History*, the Univ. of Malaya (K. L.), 1960。

Dr. Alstair Lamb はケンブリッジ大学出身。マラヤの考古学的・先史的研究。

Dr. Wang Gungwu ロンドン大学出身。宋の政治構造と、15～19世紀の東南アジアに対する中国貿易の歴史が専門。著書として *A History of the Nangang Chinese*, Singapore, 1959 がある。

Miss Mary Turnbull は現在ロンドン大学で、1830～71年のマラヤ史をテーマに Ph. D. 論文を作製中。

Dr. Bassett はオランダのインドネシア植民史専攻。

そのほか、数人の講師がヨーロッパ史を担当し、客員教授としてアメリカの Purdue 大学の Prof. G. H. Meyer がアメリカ史、カリフォルニア大学東南アジア研究所の Prof. Paul Wheatley が東南アジア史を担当している。

### III その他

そのほか本稿では詳細に紹介する余裕がないが、インド語文研究、イスラム研究、マラヤ語文研究、中国語文研究、地理学、社会福祉関係の諸学科があることを指摘しておかねばならない。

また1961年度からはじめて政治学科が開設され、主任

教授 Prof. R. S. Milne の赴任をみたが、講座の整備にはなお今後数年を要するであろう。

さらに本大学の社会科学学術誌としては *The Malayan Economic Review*, *The Journal of Southeast Asian History*, *The Journal of Tropical Geography* があり、また法学部においては *The University of Malaya Law Review*, 社会福祉学科では *Malayan Sociological Review* がある。

以上にマラヤ大学の社会科学、とくに東南アジア研究部門を経済、歴史の両学科を中心に紹介した。建設途上の諸国に無理からぬことであるが、講座の専門分化はいまだしで、スタッフの不足が感じられている。しかしその反面、経済学科でも歴史学科でも、マラヤ地域研究の広大な処女地を学問的に切り開いていこうとする意欲がすこぶるさかんである。

シンガポール現首相、マラヤ連邦副首相、マラヤの社会主義政党的指導者がこの大学で育った戦中派の同級生である事実が示すように、マラヤのエリートと政治指導者の性格を知るうえにもこの大学の今後の発展は注目されるべきである。

(アジア経済研究所海外派遣員 長井信一)

—在シンガポール—

## ブラジルの経済構造

— アジア経済研究シリーズ 22 —

- 第1章 ブラジルの自然と人口、産業.....柴田銀次郎・山崎禎一  
—人口分布・自然的地域区分と第1次産業・地質と鉱産地域・経済発展にみられる特性—
- 第2章 ブラジルの交通網.....山本泰督  
—ブラジル交通網の特殊性・交通計画・最近の交通事情—
- 第3章 ブラジル農業と農業政策.....柴田銀次郎・西向嘉昭  
—農地制度と農民階級・農業生産性・主要農林畜産物とその政策・一般農業政策—
- 第4章 ブラジルの工業と開発計画.....川田富久雄  
—ブラジル工業の史的発展・主要工業の現勢・動力・工業化と貿易構成・開発計画—
- 第5章 ブラジルの貿易と貿易政策.....藤井茂  
—ブラジルの工業化と貿易構成・ブラジルの国際収支とアジオ制度の背景・アジオ制度とその推移・アジオ制度の効果と問題点—
- 第6章 ブラジルの金融・為替・資本の構造.....藤田正寛  
—ブラジル経済発展のための諸計画と金融的側面・通貨の構造・金融制度および金融構造・為替制度とその構造・資本構造—
- 第7章 ブラジルの財政と税制.....柴田銀次郎  
—国税・地方税—
- 第8章 ブラジルの工業化率と経済成長率.....片野彦二  
—分析の対象とする期間の決定・ブラジル経済における工業化の程度の変化・ブラジル経済における工業化の程度の変化と成長率—
- 第9章 ブラジルの国際経済上における地位.....柴田銀次郎